
俺と王子の奮闘記

甘楽由希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と王子の奮闘記

【ZPDF】

N1866M

【作者名】

甘楽由希

【あらすじ】

女嫌いで真っ当な人生を送るのにぴったりの男子校に入学した「俺」だったが、同じく入学してきた「王子」と出会ったことで、俺の人生は一変する……！－ちよっぴり甘めな恋愛小説です。

～登場人物紹介～

キャラ設定

佐渡 栄泉（サド エイセン） 15歳 167?

真つ当な人生を送る事を望む普通の高校一年生。告白した。「された事は一切なく、恋愛というものの自体にそもそも興味がない。

恋愛く勉強！－！というモットーを持ちながら男子校に入学したが、阿呆王子と会つてしまつてから、男子校に入学した事を後悔する日々が続いている…

阿呆王子（鈴木一郎） 15歳 170?

佐渡と同じ学校に入学した、一応同級生。ただし志望理由は佐渡とは全く違い、女子獲得のつもり（秀才が好みらしい）が、俺と同じ学校に入学してしまつた、男子校とは知らずに…阿呆だ。

因みに阿呆王子という二ツクネームの由来は王子のような口調で話す阿呆だから。それだけ。

「これって学校？？」

俺の目は丸くなつた。

田の前に見える田体が、学校以外の何に見えるんだ？？

そう思いながら、俺は学校に向かつて歩きながら

「……学校だけど？」

睨みつけながら俺はそう言つてやつた。

「嘘だね。ここは学校じゃない。牢獄だよ。」

……はあ？？

いや何、素直に言おう。

阿呆か！－！

今まで15年間過ぎててきたけれど、こんな馬鹿は見たことがないね！－！俺は基本的には嘘つかねーし、つーか第一、牢獄つて何だよ牢獄つて！－！

「学校は恋愛があつてこそ学校だらう。それなのに何だね、このムラムラとした空間は。恋愛もクソもないじゃないか。」

「はあ……」

と、俺は脱力感溢れた返事をした。この阿呆と会話してゐ事がものすごく情けなく感じるね。しかもハイジ、まさかとは思つが……

「とにかく、わざわざから氣になつてたんだけど。」

「…何？」

「僕の捜し求めてるレイニーはどうしているか分かるかい？」

やつぱり！－！俺の予想通り！

「イツ、 じじがアレだつて事知らないんだ！知らないのにノコノコ
こんなとこで…！？」

「いや、 残念だけじじにはアンタの捜し求めている物は一切ない
と思つよ。」

「どうしてだい？」

「どうしてって… じじは…

男子校

だからだよ…！」

そう、 ここは男といつも加減な生き物（お前も男だろ）しか
入れない、 と同時に、 女嫌いの俺に相応しい場所だ。

俺が必死に勉強してクソ難しい試験に合格したのも、 この素晴らしい
世界に逝くためだ。 まあ他にもいろいろ理由はあるけどな。 …と
にかく、 話しに戻るぞ。

「男子校…？」

「せうだよー！」の学校は
アンタの探し求めている物が全て排除された地獄のよつな場所つて
事さ。まあ諦めろ。じゅー！」

と俺は、別にかっこよくもない捨て台詞（なんか？）を一息で言つ
呑くし、さつさと学校に入ろうとした。この阿呆と関わつてると、
いろんな意味で危ない気がするー避難だ避難！
……がしかし。

「待ちたまえ。」

頼むから、俺の鳥肌を立たせるその王子口調はせめてくれ。

「……何だよ。」

俺もいちいち止まるなつづーの一いつて、この阿呆…急に真面目に語
りだした…

「僕は恋愛なしでは生きていけない。今までも、そしてこれからも
ね。こんな牢獄にいたら、僕はきっと明日には木乃伊になつて……
「ほこはい、ミライにならーがアンタなんかはびづでもいいよ。で、
俺に何の用だよ。」

阿呆王子……つー！

「用といつよりはお願い、かな。

僕と、

付き合つてくれない？」

突然だつた。

それは、阿呆な王子からの

「僕と付き合つてくれない？？」

「ーー？」

落ち着け、落ち着け。

「まあアンタの気持ちは分かった、よく分かった、だがな、取り敢

「好きだから」

「じゃあ何で

「田も承知さ

「俺は男だ」

即答しやがった！しかも理由が無茶苦茶だ！

「恋愛がしたいからに決まってるだろ？」「

「えっと……何でだ？」

えず！

俺を変人にしないでくれ！

数々の男子生徒やら保護者やらの視線からよつやく解放された、場所をちょっとばかり変更し、人気のない裏庭へ行つた。

「……で？君の返事は？」

周囲の野次馬にも気にせず、堂々と（しかも男子校の前で）告白宣言したのを気にもしない……阿呆だからか。

「悪いけど、俺は恋愛には興味ねえんだ。他当たれ他

とまあ普通ならこれでさこなうといふ。普通ならなう！

「君、馬鹿？」

喧嘩売つてんのか？？
一気に殺意が沸いてきたぜ。

「男子校＝恋愛なしと考える君の頭はどうかしてねも...全く」

いや、どうかしてるのはお前の方だよ！

「まあ君がどう思つてこよつと…僕はもう決めたから。」

「何をだよ」

「君を守るつてね」

ビツビツだ?

「それより早くしないと……始業式が始まると」

「えつ……ああつ！－もつ開始1分前じゃねーか！もつと早く言えよーーつてあの阿呆いねーし！－待てコノヤローーーー！」

体育館に向かう途中、あの王子の言葉が、ずっと頭から離れてくれなかつた。

入学式といえば恒例の校長の話や、PTAからの話などなど……まるで説教のように長く感じられるこの時間、いつもなら眠つてしまひますが、今日はずっと考え事ばかりしていた……。

「君を守るつてね」

何故、俺が守られなきやならないのか。自分はそんなに弱くはないはずだ……と思いたい。

よく考えてみれば俺は結構体育会系で、中学の頃はずっとサッカーや野球や部活の掛け持ちばかりしていた。

けれど

「……目標を持つて行動するというのは非常に大事な事ですね。」

なにも変わっちゃいなかつた。

(さあて帰るか……)

無事に入学式が終わつた。……俺の人生も半分終わつてるんじゃな
いかと思いつつ、早く教室に帰りゆうとした、その時

「……」

あいつが隣にいた。……いつの間に？

「……。」

中高一貫でもない高校の入学式だからか、あまり会話をしている生
徒はいない。とても静かだつた。そんな中、俺が思い付いた話題は
ただ一つ

「王子……って呼んでもいいか

もつとマシなのなかつたのかよ、俺。……後でビーフせ自己紹介はや
るだろうが、俺にはこの呼び方以外考えられない。

「別に僕は構わないけどね。……でも僕の名前には似合わないかも

「……」

「性格とかなら似合うかな」

「……性格か」

「……え、俺も昔は性格で随分悩んだ事もあった。
誰かを失った事も勿論ある。
だから、

「……もう誰も失いたくない」

しまった、つい…

けれど王子は、俺の顔を見て

「大丈夫、僕は消えない
絶対に」

といつただけだった…

「……本当か」

「まあ、多分」

「俺は……やつもやつたけど、恋愛には全然興味がないんだ」

「うそ。」

「でも……誰かと共に生きたってこつま持つねー思つてるわ
しこ」

俺は何でこんな事を話しているのか分からない。
俺は……一 体なにがしたかったのだろう。

「……………」

「…句?」

「おひなたで歌の歌」

「…やべへんじやだね」

「こせそんなへぬ元へはなこ」

「うわわわ…」

「こやだから廻へね」（Hンダレス）

『いい？いい子だからここで待ってるのよ。』

『うん…分かったよ』

『お兄ちゅさんと仲良へあるのよ。』

『……うん。』

いつだか覚えてないけれど、小さい頃に兄と俺は、施設に預けられた。

この時預けられたばかりの俺には状況が分からなかったので、日々性格が変わっていく兄を見て

『兄ちゅさん、大丈夫？』

と言っていたものだ。性格が段々きつくなるつていうのか？よく俺に暴力を奮つよにもなった。兄はきっと俺の事が嫌いになつたんだなと思い、

『兄ちゅさん、

バイバイ

… いつして俺は一人暮らしを始めた…

「そんなに長くはなかつたね」

「だから言つただろ」

「んで、今も一人暮らしなの？」

「……ん、そり

「ふーん、じゃあ

僕と一緒にだね

……は？ そうなのか？

「もちろん君みたいに哀れな家庭の事情があつた訳じゃないけどね」

「じゃあなんでだ？？」

「秘密」

何故秘密！？

「というわけで僕に一つ名案が浮かびました」

「一体何だよ…」

「それは… そうだね残念ながらもう教室に着いてしまったから…
放課後2人で（重要）ゆっくり語ろうか」

なんか今王子の顔に真っ黒いオーラと笑顔が見えたきがしたんだが…

「……つて待てい、放課後つて何だ！？」

「だから、下校時に決まってるじゃないか。じゃあせいぜい（僕の
名誉？のために）担任に目をつけられないように頑張つてくれたま
え」

「番号」に書いてある通り、席に座れよーーー。

生徒のざわつきよつとも担任の声がやけに大きく聞こえた。

「… ありがと、ただけ言つておく。」

「 ものすじく感じの悪い御礼をありがと」

「 といひやあ… 何でおまえ

「俺の後ろの席こいつなんだよー？」

出席番号順に並べられた席だから、俺と近い名前…なのかな?

「何でつて……そりゃあ

「ひらひあ鈴木いー！」

担任の剣幕に俺はびくつとした。俺の名前じゃない…よな?

「今から話しがちから、わざわざ席に着いてくれないか、頼むよ」

「分かりました、先生」

「……見かけの割には、随分似合わない苗字だな」

「…そりー。」

「まあ名前なんて、どうでもいいけどな。後で変えようと思えば変えられるだろいっ」

「……まあね」

「一体これからどんな事が起るのか、馬鹿の俺には全く想像がつかない。しかし、どうせなら上手くやつていきたいものだ。はたしてその願いは叶うのか……

「とこいつはで、これからもよひへ

佐渡君

なんだか、いけるかも。

- 終 -

「はあ……！」が俺ん家」

田の前には、俺の住んでるマンションが見えてる。

そして俺の隣にはなぜかあの王子がいる。

なぜか？……俺が聞きたい。

「さあとつとと帰……」

「狭いなあ」

「……はあ？ #何が」

「」のマンションは築15年、10階建て、LDKみたいだけど、
ペットも飼えないみたいだし

ペット関係ないだろ。それでなんで分かるんだ何で…

「まあせつかくだから君の部屋にお邪魔しようつかな。」

「 もう勝手にしてくれ… 、なにもかも許してやれる気分になるぜ」

「 今日は随分と無氣力だね」

「 別に。毎回シラミするのが疲れただけだ。…………つてもう行ってる」

王子はわざとドレベーターに向かって歩き出していた。俺も遅れて王子に付いていく。

そして、俺はドレベーターに乗つて……

王子が「4」というボタンを押している所を見た。

「 おこひ、お前何で」

「 君には関係ないよ」

「 いや、思ひにあらうんだろ。お前に」初めてじゃないのかー?」

「 超能力つてやつだよ」

「 ……」

この王子は何を知ってるんだ。何が言いたいんだ。もしかして俺のストーカーか?

「 冗談じゃない!!!!」

お前には聞きたい事がたくさんありますぎた。
でも…まだ聞けない。

聞いてはいけないのかもしれない。

これが、全ての始まりだった。

「俺の部屋にて」

何故か、
俺と王子の二人しかいない。

「親はいない、親戚もいない、……って何ともベタな話だよね」

「悪かつたな。とりあえず、、まず靴を脱げ!!!!靴はいたままあ
がつてくるんじゃねえよ汚ねえ————！」

ああ昨日雑巾がけをしたばかりの床が……一瞬でボロ床に。

「失敬な。ここでは土足であがつてもいいと法律で決まっているは
いや誰が決めるんだよんな事、お前が勝手に決めたんだろ————！」#
「

「分かった、分かった！——地理がものす！」おく苦手そーなお前に行

つとへが、王子は日本一のAPANIIだーー！」

「日本？」

「…………なんかここにいつ変だぞ。いやもとから変かもしれないが……（今度は絨毯踏んでるしな）

「この王子はまるで自分がどうここにいるのか分からぬ、といつ風に話しているかのようだあるが……

（…………まあいい）

別に俺には関係ない、ただボケてるだけだと軽視していた。
とこうよつ、、わうする他ないなと黙つた。なんでかよく分からん
奴。

どつか適当に座れと俺が言つ前に、既に座つてゐる王子に俺は切り
出した。

「で、何をしたら出でててくれるのかよ……王子

「やの前にまず、」

な、何だよ……

「茶を入れたまえ」

「……………。
」

お前なんなんだ――――――(ヒヒー)

「……茶は自分で入れるよ

「そこにあるの使っていいかい?」

「……好きにひる

俺と王子は互いに顔を見合させてから、……先に王子が喋った

「」のお茶■なかなか美味しいね、どうで買つたの?」

俺はそつなく答えた。とにかく早くこの場から逃げ出したい。

「……別に

「今度僕も作つてみよつ

「……勝手にひる

「ねえ、何で君はそんなに僕のことが嫌いなの？」

「……俺の勝手だろ」

「それもそりだね、でも気にくわないんだろう？」

「……」

そんなの知るかよ。

とにかく気に入らない。

その馴れ馴れしい態度とか…

あとま.....つて.....あれ.....なんだか.....

聞.....つ.....

「いじ俺は初めて氣づいた。

.....

「君にしては警戒が足りなかつたんぢゃないのかな?」

「.....へやつ」

もつと早く氣がつくべきだった。

あの野郎.....睡眠薬なんか.....

「お前、わざタジやねえか.....」

……『俺』の記憶は、

そこで途切れた。

「……ふうやれやれ、彼は効き田が遅かったなあ

……隠れてなごでせつねと出て来たらどうだい？」

「……チッばれてたか

ドアから入ってきたのは、王手と同じくらいの身長がある男だった。

「……用件はただ一つだ」

「…何だい」

男は深呼吸をして叫んだ。

「わかつてゐんぢろ

……そいつを俺に渡せつ！－！」

「無理だよ、一郎」

「もうか……なうばかりづくで……」

「よし、喧嘩は外でやうづか
(「(一) 応人ん家だし」)

(相変わらずだな一郎……)

「こつも通りの『武器』でこくよ、僕は

「ああ……そ、うだ俺今回だけは違つ『武器』を持つてきたんだ……」

「……」

少しだけ一郎は警戒した。

「……れだつ……」

「……鉈??.」

「やうだ……俺は『ひ○らじ』で使われての見て憧れて、ようやく手に入れたんだ!! ひ○らじって知ってるか? もうそれは最高なアニメで(略)」

「ふーん……別にどうでもこことナビ、おしゃべりも程々こね

「……なんで後ろに？！」

「勝つのは僕だと決まってるんで」

「……？」

一郎は思いきり殴られた。

一郎はすぐ倒れた（早）

「君に邪魔なんかさせるものか」

一郎は消えた。

……

はあ、ソファーなんかで寝たから、頭痛い……

「…………もう夜か」

いつの間にか日は沈んでいたらしい。

「……お前」

王子はいた。

「…………」

「お前……何……持つてんだ??」

「これ？」

「

眠気がなくなり

意識がはつきりし始めた時

一人きりの誕生会が

始まつた。

一人きりのBirthday 編 前

～再び俺ん家にて～

はあ
……

今俺の目の前にあるもの

?王子

?ケーキ

?豪華な金の紙に包まれたプレゼントらしきもの(?)

：

……

?は分かる。?は勝手についてきたストーカー。

？と？た。

？に聞くしかないか。

「？と？つてなんだ？」

「？は君の誕生日だから持つてきたのさ

何で通じるんだ！！本当にこいつエスパーか？

そんでも何て言った

『誕生日！？

「今日そりゃ俺誕生日だ！」

「そうだね」

「何でそんな事知ってるんだ？？」

学校でやつた自己紹介で言つた覚えはないが……

すると王子は一枚の紙を取り出した。

「なんだそれは」

「君の戸籍書」

「いろんな意味ですか」「……

つーか人の戸籍書盗るのって犯罪じゃないかー？

「？は聞くのアソント」

「誰がんでも分かるわやねべらー」

「全く素直じゃないね」

悪かったな。

「へがくへ

誕生日、おめでとう

「……あつがと」

アキアキ

……つてなんで緊張してんだ。。

親が死んでしまつてからは祝つてもいい事がなかつた。

だから… なのか

「……？」

泣けてくるんだねつ。

「……」

「食べるかい？ ケーキ」

「…りん」

俺は涙が出るのを堪えながらなんとか声をだした。

「因みに自家製だよ」

やつぱお前すげえええ――――――――――――

一人きりのBirthday編 後（前書き）

～いきなり警告～

ここからは「よいよ王子が本格的なアプローチをしてきます。

苦手な方は「注意を…

一人きりのBirthday編 後

「泣かないで」

「く……」

俺が泣き止まないのが分かると、王子はいきなり顔を近づけてきた。

なつ
……

いきなりA！？

「んつ……」

何て声出してんだ俺…！

じめいへじへから離された。

「……止まつたかな？」

不思議なことに止まつている。

涙はあまり見せたくなかつたのだが…

「……なんだか眠くなつてきた……つてもう少く一時じやん」

「……本当だね」

「……もう帰つた方がいいんじゃないのか」

一応高一だし、と俺は付け加える。

「…でも君が困るんじゃなー?また寂しくなつて泣きやうな気がする」

「今まで子供じやなー?」

「……僕にも両親いないから、君が泣くする必要はないよ。」

……忘れてた。そういえば入学式の時泣いてたな。

「……」めご

「……」

ドサッとな

ひいいー！なんか知らんけど俺押し倒されてるーーー！

「初めからそのつもりだったのか」

「まあね

つて俺も向~~か~~んで質問してんだよー早く逃げろよおーーー！

と思つたけれど、意外と王子の力が強くて

振りほどけなかつた

しかも、さつきから変だ。

顔は勝手に赤くなるし、

「好きだよ」

ところの台詞にドキドキしてゐるしー

…誕生会は、まだまだ終わらない。

—人きりのBirthday編 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1866m/>

俺と王子の奮闘記

2010年10月28日03時16分発行